



「ふるさと学習読本」を活用して、ふるさと学習の充実を

「ふるさと学習読本 Vol.12」を出版しました

恵那市の「志」教育を支える「恵那市ふるさと学習読本」vol.12が完成しました。今回の題材は「ジュニア版恵那市史平成合併編『誕生』と『成長』の二十年」です。

平成16年(2004年)に新生恵那市が誕生するまでのあゆみ、誕生してからの各分野でのあゆみ、そして新しい市での地域づくりの様子について、わかりやすくまとめた一冊です。恵那市のあゆみについて知ること、恵那市全体だけでなく自分が住んでいる地域のあゆみへの興味・関心を高めることができるように願っています。



Vol.12ふるさと歴史編「ジュニア版恵那市史平成合併編『誕生』と『成長』の二十年」は、市制20周年の記念号として、令和7年1月の恵成式や3月の中学校卒業式で新成人や卒業生に配付されました。4月には、5年生へ配布されました。また、各校の図書館にも配置しました。社会科や総合的な学習の時間、読書活動などで活用し、各校のふるさと学習を充実させましょう。

温故知新

心に残る
遊び・授業・先輩・職員

「汚したくない教室」を大切にしたい



恵那市立三郷小学校
山内 峰子

小学校3年間の初任を終え、中学校に勤務した教員5年目の時のことです。いわゆる荒れた学年の担任となった時、当時の学年主任の先生が「子供たちとの出会いを大切にしよう。子供たちが『あきらめ』や『自暴自棄』になっているとしたら、僕たちは子供たちの可能性を信じていこう。まず、みんなで教室を徹底的にきれいにしよう！そして、新しい気持ちでスタートを切れるようにしよう！」と言われました。

学年所属のメンバー7人は学年初めの事務仕事や行事の打合せよりも、まず、教室を徹底的にきれいにすることから始めました。鞆を入れるロッカーの背面板は割れて、その奥からは次々にお菓子のごみが出てきました。すべて取り除き板をピッタリに切ってはめこみました。

足の裏をこすりつけたような汚れたドア、黒板下の壁などは、明るく落ち着いたグレーの色でペンキを塗りました。作業は、丸3日かかりましたが今思えば一緒に作業をする学年の教員仲間と話をすることで「同士の絆」が築かれていったように思いました。

同時に、生徒たちが新しい教室に入った時「わあ、きれいな教室」と感動し、心から喜んでくれるだろうと想像を膨らませていました。私たちのそんな思いに予想以上の反響があり、「中学3年生という一年が人生の中でどのような意味をもつのか、一人一人の夢に近付けるよう応援したい」と担任らが話すことに真剣に耳を傾けてくれました。

そして、それを後押ししてくれたのは、生徒指導の先生の話でした。生徒指導の先生は、担任たちがどのような思いでペンキを塗っていたのかを静かに語ってくれました。そして、「汚さない教室」ではなく生徒自身が「汚したくない教室」を創り上げていくことの意味を語ってくださいました。

私の「教室」への基本的な思いはここにあります。今、子供たちの過ごす教室は「汚したくない教室」になっているでしょうか。

発行日

令和7年
9/22

恵那市教育研究所だより

No.289



作品 | 私の大切な風景 |

恵那市教育研究所 恵那市長島町正家一丁目1番地1恵那市役所 西庁舎4階
https://www.city.ena.lg.jp TEL (0573) 26-6850 FAX (0573) 26-2155

恵那市立大井小学校 6年 額額 晴斗さん

高校野球から学んだこと



恵那市教育委員
小栗 秀子



試合の雰囲気はどこか温かくなることも感じています。会場全体が、応援し合い、認め合う空気に包まれると、子供たちの表情もいきいきしてきます。ただ勝ち負けにこだわるだけでなく、みんなでスポーツを楽しむという空気が、そこにはあるのです。

最近では、多くのスポーツで子供たちの参加人数が減っていると言われていています。原因は色々ありますが、過度なプレッシャーや、勝つ事ばかりを求められる環境が、楽しさを奪ってしまっているのかもしれない。でも、相手を称え合う温かな雰囲気があるスポーツなら、「またやりたい。」「もっとがんばりたい。」と思えるのではないのでしょうか。

こうした思いやりのある競技環境は、スポーツの中だけでなく、社会に出て役立つ心の育て方だと思います。自分と違う相手を認め、リスペクトする姿勢は、学校や職場、地域でも大切にしたい価値感です。

高校野球の選手達が見せてくれた姿勢には、教育の本質があると思いました。スポーツを通して人を育てるとは、技術だけでなく、どう人と関わっていくかを学ぶこと。自分の力を出し切るだけでなく、相手を尊重し、感謝の気持ちをもつ。その経験こそが、人を大きく成長させるのではないのでしょうか。

試合に勝ったり負けたりする中で、うれしい気持ちや悔しい気持ちも体験します。でも、それ以上に大切なのは、「相手がいるからこそ、この時間がある」という気持ち。応援する私達も、その思いを大切にしたいと感じました。

これからも、子供の試合を見に行った時には、相手チームのプレーにも心からの拍手を送りたい。スポーツがくれる温かなつながりを、もっと多くの人と分かち合っていきたいと思います。

令和7年7月7日、高校野球神奈川大会の開会式で行われた選手宣誓に、私は強く心を打たれました。その中で、「今大会中、お互いの好プレーに対して拍手や歓声を送り称え合う事にしませんか。」という呼びかけがありました。それはただのスポーツマンシップではなく、人としてどうあるべきかを教えてくれる、大切な言葉のように感じました。

私の子供もスポーツ少年団で野球をしていて、よく試合を見に行きます。応援していると、相手チームの選手がすばらしいプレーをする事がよくあります。そんな時、つい「ナイスキャッチ!」「ナイスピッチング!」と声が出てしまうのですが、以前は「しまった」と思う事もありました。応援している自分のチームを盛り上げる事が一番大事だと、どこかで思い込んでいたのです。

でも、あの宣誓を聞いてからは、考え方が変わりました。選手たちが「お互いに称え合うこと」を大切にしようとしているなら、応援する大人たちも、同じ気持ちでいられたら良いなと思いました。

試合は、相手がいて初めて成り立ちます。どんなに練習をしてきても、競い合う相手がいないと、本気を出すこともできません。だからこそ、相手は「敵」ではなく、「共に成長する仲間」なのだと思いました。

そして、相手チームのプレーに対して拍手を送ったり、「今のプレーはすごかったね。」と声をかけ合ったりすることで、



1 嘱託所員の歴史



恵那市教育委員会における嘱託所員制度は、長年にわたり本市の教育を支えてきた制度です。制度設立以来、授業研究や若手教員の育成を通して、学校現場における授業力向上の中核的な役割を果たしてきました。『研究所だより No.287』でも紹介した『Know-Howハンドブック』の作成も嘱託所員の先生方の取組の一つです。時代の変化とともに教育課題は多様化していますが、嘱託所員は、そのときどきにあった教育理論を学ぶとともに、常に現場に寄り添いながら、子供たちの学びを支えるための提案と実践を積み重ねています。

2 今年度の嘱託所員の紹介



今年度は4名の先生方が嘱託所員として活動しています。それぞれが日常の学校業務を行いながら、日々の授業実践を通して力量を高めながら、市内の先生方に向けて貴重な提案を行っています。

- 大井第二小学校 原田 将伍 先生
- 上矢作小学校 島倉 健吾 先生
- 恵那西中学校 岩島 慶尚 先生
- 恵那北中学校 下山 渉 先生

3 嘱託所員の役割

嘱託所員は、まず自らの授業力を磨き、教育実践の質を高めることを大切にしています。そのうえで、市内の先生方に授業改善の視点を提案し、全体の授業力の底上げを図る役割を担っています。個人の研鑽と共有の両輪が、嘱託所員の活動の根幹を成しています。

4 例年の取組



右記のように恵那市が実施する他の研修への参加を大切にしています。

取組 嘱託所員は例年、以下のような取組を行っています。

- 先進校研修を行い、実践発表を参観して見識を深める
- 2年目教員に授業づくりの基本を伝える
- 5年目教員に授業を提供し、授業のポイントとなる視点を与える
- 5年目教員の授業を参観し、的確なアドバイスを行う
- Know-Howハンドブックを作成し、知見を体系化する

5 今年度の取組



今年度は、昨年度までの3年間の『Know-Howハンドブック 授業づくりの基本』で示された指導案の書き方を基に指導案を作成するとともに、授業動画を撮影し、授業のポイントを具体的に示す取組を進めています。動画には、指導案では見えてこない実際の教師の働きかけとそれに対する子供の反応を収め、恵那市内の先生方がいつでも視聴できる仕組みを整えています。これにより、実際の授業の進め方や児童生徒の反応を共有でき、授業改善に直結する学びを得ることができます。

さらに、この動画に関連する内容は、今年度の『Know-Howハンドブック Vol.13』にもまとめられ、体系的に活用できる形で市内に提供されます。

6 まとめと展望

嘱託所員制度は、恵那市の授業改善と教師の成長を支える重要な仕組みです。各所員が積み重ねる研鑽と提案は、若手からベテランまで全ての先生方の授業力向上に結び付きます。今後も嘱託所員の活動を一層充実させ、子供たちの学びを支える教育実践を広げていきます。

授業動画やその他の参考動画

昨年度から蓄積されている授業参考動画やその他、児童生徒が見て学べる各種動画が右記のロイロノートに格納されています。ぜひ、ご視聴ください。

格納場所

資料箱 → (岐阜県恵那市) 先生のみ → 11DX(教材)

01 ICTの活用に向けて 先進校研修での学び

恵那市教育委員会では、児童一人一台端末のさらなる効果的な活用を目指し、7月16日に静岡県吉田町立住吉小学校(文部科学省指定 リーディングDXスクール事業推進校)における先進校研修を実施しました。本研修には、嘱託所員の先生4名とICT活用推進担当の代表2名に参加していただきました。

本研修では、公開授業を通して、子供たちが主体的に自分の学びに向かう姿を実際に見ることができました。

02 ICTの活用に向けて 一人一台端末の活用と教師の役割

授業では、児童が一人一台端末を学習用具として当たり前活用しており、必要な情報を自ら調べ、比較し、考えを深めていく姿が印象的でした。教師から与えられる情報を受け取るだけでなく、自分で問いを立て、答えを見いだしていく過程を端末が力強く支えていることが分かりました。

一方で、教師の役割として大切にされていたことは、個別に進む学習の状況に合わせ、児童一人一人の学習の様子を確実に把握し、理解のつまづきや思考の進み具合を見取ることでした。また、単元を通して学習の見通しをもたせ、学びを俯瞰できるように支援していました。これにより、今日の学習で自分は何を学ばかを考え、学習に取り組む児童の姿がありました。このように、子供たちが一人一台端末を学習用具として積極的に活用するとともに、教師が一人一人の状況を見届けることの重要性を再確認しました。



授業風景

03 ICTの活用に向けて 情報活用能力の9年間を見通す

さらに当日は、信州大学教育学部の佐藤和紀准教授からご講話をいただきました。佐藤先生は、「小学校から中学校までの9年間を見通した情報活用能力の育成が不可欠である」と指摘されました。そのためには、単発的なスキル指導にとどまらず、教科を貫いて情報を収集・整理・表現する力を伸ばすことが必要です。また、「主体的な学びを生み出すためには、教師から与えずにすることが大切である」とのお話もありました。

子供たちが自分で考える余地を残し、試行錯誤できる場をつくることで、真の主体性を育む基盤となります。



学年	主な情報活用能力の育成内容
1・2年	端末の基本操作、文字入力、調べ学習の基礎、情報を絵や短い文で表現する。
3・4年	キーボードによる文字の正しい入力ができる。インターネットや資料から必要な情報を選び取る、整理する、仲間に伝える。
5・6年	キーボードによる文字の正確な入力ができる。複数の情報を比較・分析し、意見をまとめる、プレゼン資料をつくる。
中1・中2	キーボードによる十分な速さで正確な文字の入力ができる。課題に応じた情報収集・整理、協働的な資料作成、情報の信頼性を判断する。
中3	情報を根拠に基づいて表現・発信、情報モラルを踏まえた活用、自己の学びに生かす。

04 ICTの活用に向けて 恵那市として大切にしていきたいこと

現在、恵那市の先生方の多くの授業で、上記の先進校と同じように子供の考えや振り返りを端末で提出させることで、子供の状況を見届けようとしてみえます。

今後は、前回の研究所だよりN0.288の「授業参観する8つの視点」でもICTの活用等で記載してあるように、子供自身が端末から開設動画等のリソースにアクセスしたり、仲間の考えを参照したりする学習道具として使う姿を増やしていきましょう。



GIGAワークブックえな

恵那市では、令和2年度にGIGAスクール構想に基づき、一人一台端末の整備を行いました。以来、子供たちはICTを活用し、調べ学習や発表、家庭学習、オンラインでの交流など、多様な学びに取り組んでいます。そのような状況の中、ICTの活用が広がるほど、個人情報の扱い方、SNSでのやり取りなど、子供たちが判断に迷う場面は多様化・複雑化しています。同時に、情報社会の一員としての責任や倫理観を理解し、よりよい社会を築くための態度が求められています。こうした背景を受け、今年度より恵那市教育委員会では、子供たちが安心・安全にICTを活用し、適切なスキルを身に付けた情報社会の一員となれるよう、『GIGAワークブックえな』を作成しました。このワークブックは、ネットの特性やリスクを理解し、適切なコミュニケーション方法を学ぶために、子供たちが主体的に考え実践的に学び、行動できる態度を育成できるよう、児童生徒の発達段階に応じて3段階に分けて構成しています。



「GIGAワークブックえな」ビギナー版

各段階の内容

GIGAワークブックえな 3段階構成

01 ビギナー

主に小学校低学年向け

ビギナー版では、ICTとの基本的な関わり方を扱います。「ゲームをやりすぎてもいいの?」「友達の写真勝手に撮ってもいいの?」といった子供たちの日常に身近な問いから出発し、「困ったときは大人に相談する」「ルールを守って使う」といった情報と向き合う基本的な態度を育てる内容です。

02 スタンダード

主に小学校高学年向け

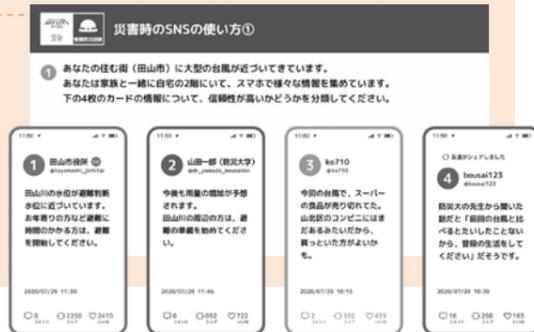
スタンダード版では、情報を扱う力やSNSでのやり取りなど、実践的なテーマを扱います。「調べた情報は正しいの?」「チャットで嫌なことを言われたら?」といった場面を題材に、正しい情報の見極め方や、他者と適切に関わる態度について考える内容となっています。

03 アドバンスド

中学生向け

アドバンスド版では、著作権、誹謗中傷、フェイクニュース、位置情報の取り扱いといったより高度な課題を扱います。中学生として、自分の発言や行動が他者や社会に与える影響を意識しながら、「情報社会を主体的に生きる力」を育む内容となっています。

災害時のSNSの使い方①実際の資料▶



11:50の情報

教材等で使用する際には…

授業展開例や問いかけなどを掲載した教師用指導書が付属しています。このような内容に不慣れな先生でも、指導書を見ながら授業を進められます。1単位時間で使える授業例に加え、15分の短時間学活で扱える内容もあり、学級の実態に応じて柔軟に使えるよう工夫されています。また、全ての内容を実施する必要はなく、必要な部分を選んでの活用も可能です。

授業での活用手順

- STEP 01** 教師用の端末(ロイロノート)に、下記のフォルダから3段階のうち使用するワークブックのPDFをコピーして貼り付けます。
- STEP 02** 貼り付けたワークブックのうち、使用するページのPDFを選び、児童生徒の端末(ロイロノート)に配付します。
- STEP 03** 児童生徒は、ロイロノート上で配付されたPDFに自分の考えを書き込みながら、仲間と話し合うことで、正しい知識や判断力、実践力を身に付けていきます。

おわりに

『GIGAワークブックえな』は、情報についての知識や判断力、実践力を“教える”のではなく、“共に考える”ことを重視してつくられています。子供たちがこれから先、予測のつかない情報社会を生きていくためには、自分の頭で考え、行動を選び取る力が不可欠です。ワークブックでの学びを通して、ICTを使う力と、それを支えるモラルの土台をしっかりと育てていきたいものです。

データ格納場所

- コネクトQフォルダ
 → 01教職員共有 →
 02教育研究所 → 33情報モラル
 → GIGAワークブック

恵那市立城ヶ丘こども園

本園は、0～5歳児の140名が在園すること、中山道大井宿に由来する恵那市の中心街にあり、小中高等学校が隣接していることから、多様な人やものに関わる活動を柔軟に展開しやすいことが強みです。こうした強みを生かし、一昨年度から特色ある園の活動を「つながる活動」としてしています。今年度は、一層、子供の「やってみたい」という思いを引き出し豊かな体験につなぐ保育を工夫しています。

1.体験を豊かにする

年中組は、「トマトケチャップを作りたい」という願いのもと、春に校区の恵那農業高等学校の生徒からトマトの苗を植えるための土づくりと植え方を学び、毎日世話を続けました。トマトの茎や葉が大きくなった時、実がなった時、色づいた時、真っ赤になったトマトを収穫しておいをかいた時など、トマトの大きさ、におい、数の変化に驚き、発見するたびに、トマトへの見方が広がりました。さらに、9月に実施するトマトケチャップ作りに向けて、高校生が小さい子でも食べられるケチャップを試作しているなどの情報のやり取りによって、高校生の思いを園児なりに受け止め、感謝の気持ちやふれあうことの楽しさを感じるなど、体験を豊かにしています。

2.探求心や想像力を広げる



年長組のA児は、廃材であったダンボール箱を電車に見立てると、「携帯電話があったらいいね」「ハンドルがあると本物みたい」と、友達とやり取りしながらイメージを広げました。さらに、廃材遊びは広がり、年長組は校区の恵那高等学校の生徒が開発したダンボールを使ったおもちゃと一緒に作

り、遊ぶことにしました。宝箱の製作を終えたB児が箱の蓋を裏返している様子を見た高校生が「それなあに?」と問いかけたことで、「これは宅配郵便屋さん」という発想が引き出されました。そして、そのことがグループの仲間と共有されると、宝箱が配送車に変身してマジックを配達する見立て遊びが始まりました。

自分で製作する楽しさが、仲間や自分よりも年上の高校生とやり取りすることで、探究心や想像力を一層広げ、共に遊びを作って遊ぶ楽しさを味わう豊かな体験となりました。

3.関わり方を体験する



お楽しみ会では、年中組、年長組はお店屋さんを開きました。まず、どんなお店にするか、何を売るか、たくさんお客さんを招くためにどんな言葉をかけたらよいか、お客さんとどんなやり取りをするかというのを考えて相談し合い、練習しました。

当日は、年中組はねじり鉢巻き、年長組はお神輿担ぎをした後、法被を身に付けると、お祭りムードにどっぷりと浸り、張りのある声が飛び交いました。給食もお祭りメニューで、調理員とのやり取りを年少組も楽しみました。さらに、未満児との関わりによって、年中、年長組は年下の園児と自然に目の高さをそろえて声をかけたり、ゆっくりとした動きに合わせて手を差し伸べたりして、相手の立場に立った関わり方をしていました。一方、未満児は、家庭に帰ってから家族をお客さんに見立て、楽しかった年中、年長組のお店屋さんをまねて、言葉や物のやり取りを楽しむ遊びに発展させるなどして、遊びを広げていました。

この他、小学校との交流、地域の太鼓交流、お茶会、高校生と園児が創る絵本の部屋改造計画も進めています。これからも、人や物とつながる活動を通して、豊かな心を育てていきます。

